

---

# 少女探偵

銀咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女探偵

### 【Zコード】

Z3376Z

### 【作者名】

銀咲

### 【あらすじ】

この小説は他の名前が同じ名前の小説、人、団体などとは一切関係ありません

中卒の主人公は職探しをしている時、インターネットで探偵の助手の応募があつてている事を知った

他に行く当ても無かつたので、主人公はそこに行つてみる事にした  
そして主人公は、探偵助手として新たな人生を歩んで行く  
というお話です

読んで見て下さい

## 設定資料

設定資料です  
読みたい方は読んで下さい

### 【坂上 洋】

主人公

性格は地味なぐらい普通

中学の時に色々あつて、高校には行けなかつた

親はいない

親戚にお世話になつっていた

詳しく述べ一章で

### 【星野 楓】

ハイテンションショソノクなりよ

ギャルとは違うウザさを持つてゐるなりよ

私立神山高校に通つてゐるなりよ

高校の中では超有名、校長と理事長に貸しがあるなりよ

クラスの人気者…だが、一部の女子にはあまり良く思われてないなりよ

親は不明なりよ

彼氏はいないなりよ

### 【神崎 香美】

楓の住むアパートの大家さんなのだ

ナイスBODYなのだ

101号室に住んでゐるのだ

読心術、催眠術、マッサージが得意なのだ

中学は剣道で、高校は薙刀で、大学は空手で、九州一位を取ったのだが大学を卒業しても就職しなかつたため、暇潰しに検定を受けていたところ、漢検・数検・英検共に一級を取つたのだ  
親は不明だが、時々手紙を送っているのだ  
彼氏はいないのだ

### 【赤星 白哉】

元ホストだが、今はスキーをしに日本を駆け巡つている  
泊まるところは、口説いた女のところ、お金がない時は、口説いた女から貰うというヒモ生活を送つてている  
親はどこかに住んでいる

大学が東大だつたため、友人は日本中にいる

### 【島内 静也】

「R X m a p社」社長であり、ブルーランドの経営者の人  
スージーがとつても似合う人  
人を助けるためには手段を選ばない人  
過去に、会社のお金を全て募金しようとした人  
今は会社のお財布は持つていない人  
父は死んでいるが、母と2人で頑張っている人  
故郷は中国だが、0歳9ヶ月のとき日本に来た人

### 【中道 利沙】

「R X m a p社」の秘書であり、会社の財布を握つてゐる人である  
スージーがとつても似合う人である  
ボン、キユツ、ボンである  
ヤクザ（20人）を一人で倒した人である  
普段は真面目にPCの前で、力チカチしているのである  
親は神奈川県で元氣にしているのである  
一方的に静也が好きである

付き合っているかは不明である

### 【島内 佐美子】

静也の母親てきな

80を超えているてきな

息子思いの優しいお婆さん…てきな

元歌手だった…てきな

手芸が得意…てきな

まだ杖も車椅子も必要のない元気なお婆さん…てきな

親は不明…てきな

夫は死んでいる…てきな

### 【怪盗〇】

怪盗4天王の内の一人で「」される

正体は不明で「」される

親も不明で「」される

恋人も不明で「」される

故郷も不明で「」される

秘密結社「after days」の社員で「」される

### 【秘密結社「after days】

怪盗達の秘密結社…かもしだれない

ここに怪盗は超一流…かもしだれない

アメリカに本社がある…かもしだれない

4天王は、イタリア・アメリカ・日本・オーストラリアにいる…かもしだれない

実は、実在していない…かもしだれない

### 【最後に】

感想、

苦情、

アイディア、

挿絵、

人生相談、

誰とでもいいから話してストレスを発散したい、

好きな人の人を振り向かせる方法を聞きたいなどありましたら、

ここに送つて下さい

できる限り対応して行きたいと思います

gionisaku9@gmail.com

ここは福岡、日本の大都市の一つである。

ビルの多い方では人がせかせかと歩いている

坂上洋はそんな所の中心である福岡市博多区に来ていた

「やつと付いたな…ざつと2時間ぐらいか」

博多駅から出て来た洋は、バッグの中にある一枚の紙を取り出した  
紙には

助手募集中！！

詳しくは事務所まで

という文字が並んでいた。洋は中卒の浪人なので就職が難しく助手として雇ってくれないか相談しに来たのである  
「こつからはどうやって行くか…」

目の前にはバス停とタクシー乗り場があつた  
タクシー乗り場では、運転士が暇そうに欠伸をしている

バス停には何人かの人々がバスがくるのを待っている

「徒歩でもいけるかな？」

紙には

博多駅から徒歩1時間！！

と書かれていた

「これは…近い訳ではなさそうだな  
どちらでいくか迷つていると

「ねえ」

後ろから声をかけられた

邪魔になつたのかな？と洋は思いながらも、後ろを振り返つて見た

「何ですか？」

そこにいたのは制服をきた少女でした

「その紙…もしかしてそここの助手になるの？」

女の子はいきなりそんなことを聞いて来た

「ん~一応そのつもりだけど、何で?」

少女の答えは意外なものだつた

「探偵とその関係者とはあまりかかわらない方がいいって聞いたから…」

女の子が言つには探偵はいろいろな所に足を突つ込んでいるからいつ危険な目にあってもおかしくは無い…といつものだつた

「なるほどねえ」

洋も何度もそう思つたことはあつたので言いたい事はすぐに解つたしかし

「それでも行こうと思つよ」

「何故ですか?」

少女が聞いて來たので、洋は答えた

「探偵に憧れていたのさ」

「何故ですか?」

一度も同じ文で質問をされた洋は

「前に一人の探偵に助けられたからだよ」と答えた

「そうなんですか」

ちょっと驚いたように少女は言いました  
「そんな反応をするつて事はここにいる探偵は何か問題でもあるの?」

女の子は

「そんな事は無いです。普通の人ですよ…アレですけど」

「アレとは?」

「会つてみたら解りますよ」

それから何度も聞いて見たけれど、少女は教えてくれなかつた  
少女とは別れてバスで行く事にした

バス停から約3分の所にあるアパートの前に洋はついた

「何号室だっけ？」

「何がですか？」

洋がバッグに手を入れようとすると、後ろからいきなり声がかかってきた

振り返つてみると、女人人が立っていた

「あの～ここに探偵がいるってインターネットで知ったんですけど

「わたしがそうですよ」

と言つて來た

「本当ですか！？」

「嘘です」

女人人はクスクス笑ながら言つた

「私はここの大さんみたいなのです」

「そうなんですか…」

「その探偵は105号室に居ますよ」

大家さん（？）はそう言つてアパートの中に入つて行つた  
なんだつたんだ？

洋は思つたが

まあいいか

洋は号室を忘れないようにしながらアパートの中に入つて行つた

「あつ」

105号室にいたのは、駅にいた少女だつた

今も何処かの制服を着たままリビングのソファに腰掛けている

「初めまして…はもう遅いよね

「探偵だつたんだ…」

「そのとおり…！」

少女は胸を張つて言つた

「という訳でよろしく…」

少女探偵の名前は星野楓、洋と同じ16歳らしい  
彼女の方は洋と違つて中卒浪人では無い様だ

「何であんな事言ったの？」

「あんなことつて？」

「駅で話した探偵がどうのこうのつて奴」

「ああ、あれは普通の意見を言つたんだよ

「じゃああの時言つてたアレって？」

「未成年っていうこと」

「なるほど」

「そんな事より、いいの？うちの助手になつて」

楓は洋に聞いた

「別にいいよ、雇つてくれるなら」

洋はあつさりと言つた。

「ゴツいむきむき探偵よりかはマシだよ

「確かにそうだね！」

楓はそう言つと、いきなり立ち上がつた

「よし！いくぞ！！」

「いくつて何処に？」

「大家のところだよ！－あんたもここに住むんでしょう？」

「そうだったね」

「106号室が空いているはずだからそこに住んでもいいつよ

「大家さんに聞く前に決めても…」

「あの人なら大丈夫！！！」

「まあ、あの人なら大丈夫そうだな…」

洋は頭の中でくすくす笑つて大家さんを思い浮かべた

「いいよ

大家さん（神崎 香美…といふらしき）は要件を聞く前からOKを出した

「106だろ？もう片付いてるよ

「ありがとうございます」

大家さんはとつてもいい人だな」と洋は思った

「二人一緒に住んでしまえば？」

「そ、そんな事しませんよ」

「よし、話は終わつたから早速部屋に行つてみようー！」

途中から飽きて話を聞いてなかつた楓はいきなり洋の襟を掴んで引つ張りながら歩き出した

106号室は大家さんの言つた通りに綺麗に何もなかつた  
あるのはコンロと洗濯機とベットだけだつた

「ここが今日から君の根城だよー！」

楓はここルールなどを教えてくれえた

「ここには大家さんと私以外には2人住んでいるよ

「その二人は？」

「外室中らしい」

そんな事を話してると

ピンポーン　ピンポーン

チャイムがなつた

「誰だろう？」

「大家かもよ」

そしてドアを開けてみると、男の人人が立つていた

「始めてまして」

とても爽やかな笑顔とともに、挨拶をしてきた

「は、はじめまして…あなたは？」

「俺はここの中の一人、赤星　白哉です」

「元ホストの人だよ」

いつの間にか隣に来ていた楓が言つてきた

「なるほど」

道理でかつこいい訳だ。美男という言葉がとてもぴつたしな人である

「今は違うんですか？」

「遠い昔の話だよ…」

「仕事より趣味を優先した人のいい例：の人だよ」

楓によると、昔はホストとしてやっていたけど、今は趣味のスキーをしてているらしい

「まあ、俺の自己紹介はこれまでにして大家さんが今夜はバーベキューだつてさ」

「本当ですか？」

「お前さんの入室祝いだつて言つてたよ」

「おお、久しぶりにバーベキューだ！！」

楓は寝室に行つて、ベットの上ではしゃぎ回つていた

「じゃあ、また後で」

「あ、あの

「ん？」

「もう一人の住人は？」

「今日は帰つて来ないっぽいよ。あんま気にしなくてもいいよ」

そう言うと、白哉は出て行つた

「早く準備しておりて来てね」

楓はそう言うと、

カ～ルビ～ 豚肉～

などと歌いながら自分の部屋に戻つて行つた

「これから大変そうだな」

洋は急いで準備始めた

## 始まり（後書き）

感想、苦情、アイディア、挿絵、人生相談などありましたら、ここに送って下さい

ginsakug@gmail.com

## 事件の始まり

2

洋が引つ越してから3日が経っていた。

しかも全て空であつた。

「早く『三』出の田が来い……」

とか洋かしいな懸念を書いてあると  
「『ヨリのやうに

いきなり扉が開いて、楓が入つ

「パンポンべりご押してよ…」

「そんなもんは私とあんたの間には存在しない事になってるよ」

なうで、理不足な……などと浮た思つてゐると  
「そんな事なり。だから来密があるかが、1時ご私の部屋に来てね」

「なんで来るつて分かってるの？」

「メールで来るって連絡が来たんだよ」

「なぬ四〇」

風ねずぎを耳に通つた。

久々の仕事だ

廊下から変な曲が聞こえて来る…

洋はそこへ戻しながら、開いたドアを閉めに行った。

「朝から騒がしいな…」

短針が7を指していた。

「おお～マメだね～」

1時になつて楓の部屋に行くといきなりそう言われた。

「密は1・30に来るつてや」

「なんで30分も早く来させたの？」

「今回の依頼の大まかな内容を説明しようと思つてね」

そこから楓が言つた以来の内容をまとめてみると、

ブルーランド當てに犯行状が送られて来たので、どうにかして欲しい。

というものだつた。

ピンポーン

「ほら、でたまえ」

何故か楓は探偵っぽく言つので洋は突つ込みたくなつたけれど、客の方が大事なので、黙つて従う事にした。

「どちら様ですか？」

と言つてドアを開けると、

「ブルーランドの経営社、取締役社長の島内 静也です」

「同会社の社長秘書、並びに副社長をやつている中道 利沙です」

男の人と女人の人が立つていた。

「はるばるご苦労様です。お入りください」

と言つて洋は部屋の中に入れた。

洋たちの自己紹介も済んで、早速本題に入った。

「こんな物が届いたんです。」

静也の取り出した紙には、こう書かれていた。

『6月15日、午後3時に、緑の薔薇をいただきに行きます。

怪

盗Qより

「緑の薔薇」

緑の薔薇とは、遺伝子組み換えによつて出来た薔薇である。

「という事なので、この人攫いの計画を無効にして下さい」

静也が言つた。

「これは警察の方がいいのでは…？」

洋が言つと、

「現場は、皆が楽しいテーマパークです。そんな所に仕事中の警察  
なんて入れたら、ムードが台無しです」  
と利沙が答えた。

「犯行予定現場まで書かいてあるから、後はこっしきで計画を立てる  
よ」

楓がいきなりそんな事を言つた。

「本当ですか？」

「ああ、この依頼受けるよ」

「ありがとうござります」

静也はそう言つと、頭を下げた。

「それでは、私たちはこれで」

と言つて二人は部屋から出て行つた。

「さて、助手よ」

「なんでしょうか、楓探偵」

「これから忙しくなるぞ」

楓は満々の笑みで言いました。

それから3日経つた今日は洋は楓から部屋に呼び出された。  
明日は犯罪防止のための下見に行く事になつてゐる。

その事についての説明をしている。

「明日は遊園地に下見をして行く事になつた――」

楓はハイテンションだった。

「下見だつて事を――」

洋が釘を打つとすると、

「明日はどの服を着て行く?――」

服を持つた楓が遮つた

「で、明日はどうするの?――」

洋が言つと、

「うん。明日はね――」

楓が言つた事をまとめると、

まず最初に運営会社の方に行つてフリー・バスをもらい、ブルーランドに向かう。

ブルーランドに入つたら、犯人の犯行予定地である科学館に行く。遊園地の中にある科学館なので、科学のアトラクションでいっぱいらしい。

「下見が終わつたら？」

洋が聞くと、

「もちろん、フリータイムだよ！……！」

それからずつと楓はハイテンションだった。

これは明日大変そうだな…

洋は楓のテンションを下げるのを諦めて自分の部屋に帰り、明日の準備をして、すぐに寝た。

洋は午前4時に起きた。

いや、起こされた。不法侵入した楓から。

「なんで入つて来れたの…？」

「大家から合い鍵を借りたのさ…！」

相変わらずあの大家さんは…

洋がどうにかしよう合い鍵も貰うか?と考えていると

「ホラ、ぼーっとしないで早く準備して!」

「いくらなんでも早くない?」

「9時ジャストに着くにはぴつたしだよ！…」

「それつてテーマパークの方に、だよね?」

「そんな事言つてないで早くしろ～！…」

「という訳で表に出ると、

「こんな時間にすみません」

静也さんが、車のそばに立つていた。

「なんでいるんですか?」

「昨日電話で、私が探偵さんに早く来て欲しいと言つと、『じゃあ

明日4時に来て下さる』と言われたので……

「なるほど」

後で叱つておくか…

洋が静也さんと話してくると

「早く行かないの？」

暇そうに車の中で寝つ転がっていた楓が言つてきた。

「じゃあ、今日はよろしくお願ひします」

「いえいえ、こちらこそ」

そして車は出発した。

## 事件の始まり（後書き）

感想、苦情、アイデイア、挿絵、人生相談などありましたら、ここに送って下さい

ginsakug@gmail.com

## 舞台にて見をじて行ひ

ブルーランドを経営するのは、「RX map社」である。名前の通り、初めは地図を作っていて、それからカーナビ、スマートフォンアプリの制作などをして一躍有名になつた会社である。財力はもの凄く、自分達専用の工場などを全国に建てている。ブルーランドは、経営会社がお金持ちなので、ディズニーランド並みにすごいと言われている。ついでに、建っている場所ももの凄く、孤島である。本州と繋ぐ橋が一本だけある。

「まさかこんな所に来れるとは…」

洋が惚けていると

「これから不景気によつてもつと行きにくくなるかもしだせんね」

静也さんが言つた

「ところどき、怪盗のつて何者?」

洋は聞いてみた

怪盗のとは、今回の依頼の犯行予告を出した者である

「怪盗のは、盗んだ時に暗号を置いて行つて、暗号が解けたら盗んだ物を返す性悪怪盗だよ」

楓が言つては、ヒントすら書かれてない暗号を置いて、警察や探偵をおちよくる、快楽犯だそうだ

「その暗号は、今まで一度しか解読出来なかつたそうです」

静也さんは苦虫を噛み潰したような顔で言つた

「へへ」

警察や探偵に喧嘩を売るなんて凄い人だ . . .

「警察&探偵にとつては強敵だよ」

楓は何とも思つてないような言い方だった

それから、1時間ぐらいでブルーランドに着いた  
まだ開いて無いのに、行列ができていた

「職員入口から入りましょう」

静也さんは早速僕らを案内した

「次からはここから入つていいの？」

そこは、普通の鉄製の扉だった

「こっちから入つた方が早いので・・・向こうから入りたければ、向こうでもいいですよ」

静也さんは、人がゴミの様に集つてゐる、豪華な正面玄関を指差していった

「いえ、こっちでいいです・・・」

楓は諦めたようだ

「それでは、中に入りましょうか」

ブルーランドはとても広く、氣を抜いたら迷子になりそうだった  
楓は2回迷子になった

「後で地図を上げましょ」

「お願いします・・・」

洋は一度もアトラクションに乗つて無いのにクタクタだった

「何が必要なの？、そこにあるじやん」

そう言つと、楓はそこにあつた案内板を指差した  
地図が貰えるようになった原因の人は、地図の必要性が分かつていなかつた

楓は携帯のGPSで居場所が分かつたので、洋は、地図をとても大切にしようと思った

「まあ、迷子はよくあるので、氣をつけて下さいね」

「ほんにある事なんですか・・・」

「ま、よくある事さ」

楓は氣にした様子は無かつた

「ここが問題の縁の薔薇がある施設です」

そこは一言で言うと、博物館だった

「おっしゃ……ですね……」

「ここは他に何を置いてるの?」

「科学の結晶です」

静也さんが言つたが、ここは他には無い科学に関するものが置いてあるらしい

緑の薔薇もその一つである

「こんだけデカイのなら、すごい警備でしょ?」

「そうですね、普通の強盗なら盗むのは不可能でしょうね」

静也さんは、

「これよりす」<sup>1)</sup>い設備のところの犯行もあつたせつしつけた怪盗Qには、あまり意味が無いでしょう」と続けて言つた

施設の中はとても広かつた

孤島に建つてゐるだけはある

外見はリゾートホテル並みに大きかつた

中身もいろんな意味ですごかつた

「ここにくる人つているんですか?」

今は開園直後なので、誰もいなかつた

「疲れた人…主に男性がよく来ますね」

静也さんが言つには、子守に疲れる人がよく子供を勝手に遊ばせて

おいて、親はここに来るそうだ

時々寝ている人もいるらしい

「これが緑の薔薇です」

そこには、緑一色の花があつた

「花びらでも光合成するんですか?」

「ええ、勿論しますよ」

静也さんは説明したけど、洋は全然理解できなかつた

それから、一通り建物内を散策して、お昼になつたので何か食べる

事になつた

静也さんは仕事があるので、途中で別れた

「昼はナポリタンが食べたい」

とこう楓の一言で昼食が決まった

ブルーランドには、3大料理店があり、そのうちの一つである「麺類ランド」に行つた

「麺類ランド」は三ツ星レストランである。店舗名からは想像も出来ない事実である

「豪華…」

楓は店に入ると、お店の中央にあつたオブジェにみとれていた

「お嬢ちゃん、そこは危ないよ」

右手に雑巾が入つたバケツを持つた男性が言つてきた

「すみません」

洋は楓を引つ張つて退かした

「今から掃除するの？」

「やうだよ」

そう言つと、男性は雑巾を絞つて左手でオブジェを磨き始めた

「大変ですね」

洋は手際の良さに驚いた

「15年ぐらいいやつてればコレぐらい平氣だよ」

「15年もやつてるんですけど…」

「そんな事より、早く昼食を食べたらどうだい？」

男性はそう言つと、オブジェの方に登つていった

「じゃあ、何か食べるか」

楓を引つ張りながら、洋は何を食べるか考えていた

舞台に下見をしに行いつ（後書き）

感想、苦情、アイデイア、挿絵、人生相談などありましたら、ここに送つて下さい

ginsakug@gmail.com

## 男同士のトークタイム

お昼を食べたら、楓のテンションはハンパなく上がった  
楓は、目の前にあるアトラクションを片っ端から乗つて行った  
たとえそれが子供用でも、見るからにR-18のものであつても変わらなかつた

そしてそれに洋も当たり前のように付き合わされた

「もういいだろ…」

「まだまだ…後、95個やつて無いアトラクションがあるんだから…！」

ブルーランドにはアトラクションが、ジエットコースター10台、  
観覧車2台、カーレースもどき、川下りもどき、ボートレース（見るだけ）、トリックアート、ローラースケート、映画模擬体験、声優模擬体験、動物ふれあい広場などなど…約200種類あるらしい（お店も含む）

楓は、ボートレース、3D映画などの見るだけの物とお土産屋、模擬体験などを除いた118個を乗るつもりしていた

「一人で行つてくれ…」

「ダメ！助手は一緒にいないといけないの…」

結局、全てを乗る事は出来ず、次の機会に延期された  
まだ76個もある…

「疲れた…」

洋は、案内所の中で死んでいた

案内所はよく聞く言葉で言つと、迷子センターである

今も、洋の真横で泣いている男の子がいる

しかし、洋はお構いなく燃え尽きていて、子供がいても、叩いても無反応だった

「ほら！！元気出して…！」

# 楓は元気だつた

若者は元気じやのう…

洋は力尽きた

לעדי

洋が気が付くと、そこは車の中だつた

一生きてた...「

「……神様命を与えてくださつてありがとうございます……」

卷之三

附二 桃花源記

運転していた静也さんが、

「あ...どうもすみません」

卷之三

卷之三

す  
よ

ああ……確かに……そうですね」

あやこは確かに迷子の子供達がつるわかつたからな……

「？」

そこに勝ちで寝かせている探偵さんと… です。

「ふ、ふうな事無いよ」と、楓は洋の脇の上で寝ていた。

洋がそう言つと、 静也さんは笑だした  
3分ぐらい笑つた後、

すみません…だけどその状態だと何かあつたと思いまして…」「いえ…一つだけ分かつことがあります」

二〇〇九

「こいつがガキだという事ですよ」

するとまた静也さんは笑だした

「いい事を教えて上げましょう」

笑い疲れた静也さんが言つてきた

「私がきた時、楓さんは半泣きの状態でしたよ」

「え？ 何故ですか？」

「『私のせい』で、助手が起きない…』と言つていましたね」

「原因が分かつただけでもOKにしておきましょう…」

そんな話をしながら、車はアパートに向かつていた

「それでは、今日はありがとうございました」

「いえいえ、こちらこそ」

静也さんは別れの言葉を言つと、車に乗りひつとしたが、

「ああ、楓さんが乗つたままですね」

楓は車の中で寝ていた

「じゃあ、楓さんはよろしくお願ひします」

と言つと、静也さんは洋に楓を押し付けて出で行ひつとした

「ちよ、ちよと待つて下せー」

洋は静也さんが出て行ひつとするのを止めた

「何か用でも？」

静也さんは普通に聞いてきた

「手伝つてくれませんか」

洋が頼むと

「カツブルの邪魔をする」とは出来ませんよ」と言つてきた

「カツブルではありません…！」

「まだ早いから、あまりイキすぎるとなよ」

「そんな事しませんよ…」

静也さんは笑ながら帰つて行つた

「しようがない…か」

洋は楓をおんぶして階段をのぼり始めた

だけど楓は確かに可愛いし…今しかチャンスはないぜ？一瞬にやつ  
ちゃいなよ

などと言った悪魔洋の囁きが聴こえたけれど、そこまでする気には  
ならなかつた

楓のいい香りを嗅ぎながら2階にあがり、105号室の前にきた

「…鍵がない…」

いくらなんでも、バックやポケットの中を漁るわけにはいかないの  
で、自分の部屋に入れる事にした

「今の季節なら風邪は滅多に引かないだろ」

洋はそう言つと、楓を自分のベッドに寝かせて、リビングにあるソ  
ファーに掛布団をかけて寝ようとした

おいおい、このまま寝ちゃつたら、いい事ないかもよ？いいのか？  
よくねーだろ！…起きろー！！！

ダーク洋が言つてきたが、睡魔のやうに串刺しにされて消えていった  
そして洋の意識は、闇の中へと落ちていつた…

## 男同士のトークタイム（後書き）

感想、苦情、アイデイア、挿絵、人生相談などありましたら、ここに送つて下さい

ginsakug@gmail.com

## もう一つの表情

そして、下見から一週間がたつた

あれから楓の態度は全然変わつてなかつた

「静也さん…嘘ついたのか…」

まあ… そうだよな… あいつが泣くなんて…

洋が考えこんでいると、

「よつしゃーーー！ 行ぐぞーーー！」

楓が元気よく入ってきた

「はいはい…」

洋は何もやつてないのに疲れた身体を動かして、下の階に向かつた

アパートの前には、静也さんがいた  
今日は怪盗Qが犯行予告した日である

「それでは行きましょうか」

静也さんは一人を車に乗せると、ブルーランドに向かつた

怪盗Qは、午後3時に現れるそつだ

ブルーランドには、夏休みが始まつたので、大勢の人気が集つていた

「相変わらず凄い人の量だ…」

「人がゴミのようだ…」

楓は、どこかの漫画に出てきたセリフを言つた

「あそこに並びたいのですか？」

「いいえ」

二人は即答すると、職員入口の方に向かつた

3人は、犯行予告のあつた博物館の前まで來た

博物館には館長が居た

「「「」んひわ」」

「はい、ここにちは」

館長さんは80歳を超えるお婆さんである

名前は佐美子さん

そして、静也さんのお母さんでもある  
なぜ館長をしているのか聞いてみたら

「息子だけでは心配だからですよ」

と言つ、とても面倒見のいい優しいお婆さんである

「今日は大変そうね」

「お婆さんにも話を聞く事があるかもしれないから、その時はよろ  
しくね」

「分かっていますよ…だけじねえ…一つ頼んでいいかい?」

「何ですか」

「もし、怪盗ひあつたら、サインを貰いつぱんつてくれないか  
い?」

「分かりました。貰えたら貰つておきます」

「ありがとね~」

そして、洋達は、三階にある、植物展示コーナーに向かつて歩いて  
いった

緑の薔薇は、ちゃんとガラスケースの中に収まっていた

「これからが山場ですね」

洋が言つと

「ちがうよ」

楓が返して來た

「怪盗が犯行を行なつた場合、姿を表した時にはもう犯行は終わっ  
ているんだよ。山場は、怪盗が残していく暗号を解く事だよ…依  
頼だつて一言も怪盗を捕まえてくれ、なんて言つてなかつたしね  
（へ。）

「まあ、別に怪盗は捕まらなくともいいです…見ると面白いです

から

洋は聞いてみた

「もし、もしですよ？暗号がわからなくって、盗まれていつたらどうするのですか？」

「諦めますね」

「諦めるって」

「薔薇はいくらでも咲きますから…大切なのは、他の人をどれだけ楽しめれるか…ですよ」

「どういう意味ですか？」

「怪盗Qはみんな知っています。そしてニュースなどでみんな活躍を待つて居ます。そこで捕まつたりしたら、楽しみにしていた人々は、悲しんでしまうでしょう？」

「なるほど」

「薔薇は簡単に咲きます…しかし、人の笑顔は簡単には咲きません。そんな大切なものをわざわざ枯らす必要は無いですよ」

何か深いイイ話になってしまった…

それから、犯行時間までは、博物館の前に集っていた記者の相手をする事になった

そして、犯行予告の3分前になつた

「緊張するね…」

「ワクワクするよーー！」

「私も、とても楽しみです」

「そー（ブツ）」

洋が話そうとすると、いきなり電気が消えた

「おおー！凄いーー！」

隣では、楓が感動の涙を流していた

「私は、お二人がもつと騒ぐと思っていましたよ」

静也さんは、外にいる警備の人扉を閉めるより無線機で指令を出していた

「まあ、慣れていますし」

「す、」――――――――

いい加減つるむので、楓を黙らせた

――（パツ）――

そして、電気がついた

その間、約3分

「それでは、行ってみましょ、う」

静也さんに続いて、緑の薔薇のところに向かった

「…これは確かにすごいな…」

そこには、金庫があつた

ガラスケースごと囲つてある様だつた

「ガラスケースを動かすと警報が鳴るようになつていたんですけど、無駄だつた様ですね」

「ここまで時間きつちりにやるなんて…」

「流石大怪盗！…余裕だね～」

すると、後ろの扉が開き、3人入つて來た

「この一人が、事件発生直後にいた人物です」

「苦労さまです、引き続き警備に当たつて下さい」

警備の人は、会釈すると出ていった

そして、その一人とは…こここの館長の佐美子さんと、昼食をとつたときには像を磨きにきた人であつた

「それでは、お一人にお伺いしたい事があるのですが、よろしいでしょうか」

楓がいきなり敬語をしゃべり始めたので、洋と静也さんは驚いていた  
楓のもう一つの表情がそこにあつた

## それぞれの決意

怪盗Qが盗みを働くかせて30分がたつていた  
「事情聴取があれだけだつたとは…」

楓は2人に、事件発生直後に何処にいたのかだけを聞いた

「あれだけでいいのかよ…」

「捕まえるのが目的じゃないからね」

楓は、金庫の前に置かれた紙を見ていた

紙には

『 2 2    4 3    5 1    2 2    2    5  
      2 4    3 6    7 1    8 5    9    1 0』

タイムリミットは三時間  
せいぜい頑張りたまえ

怪盗Qより

と書かれていた

「解けそう?」

「全く…解けるわけない…」

楓達は、暗号解読に入った

静也さんは、

「坂梨さん、ポケットに入つてるのは何ですか?」

あまり質問されなかつた2人に話を聞いていた

「コレですか?これはポケベルですよ

「ああ~懐かしいですね~」

ポケベルとは、携帯ができる前に通信手段として使われていたものである

それから、年配組の容疑者一人は、思い出話を始めた

それから、一時間が経過した

普段の生活ぶりからすると、考えられないほど楓は集中していたしかし、

「無理だ…わかんない…」

暗号解読は、全然進歩が無かつた

「バブルの時はー」

容疑者一人は、まだ昔話をしていた

楓は洋に休憩すると言うと、その一人の方に行つた  
洋は、一人で暗号にむかつていると、

「どうですか？」

静也さんがやつてきた

「全然です…あの2人は何を話しているんですか？」

「自分たちの人生の話だそうですよ、年配の方の人生は面白いですね」

「そうですか…」

「聞いて見てはいかがでしょうか？探偵さんも話に入り込んでいますよ」

「遠慮しておきます…これを解かないといけないので。」

「そう言うと、静也さんは笑つた

「そうですか…しかし、このバラは失つてもいいと思しますよ」

「それだけで、人々が笑顔になる…からですか？」

「そうですよ。人の笑顔はとても貴重なものですから…たとえ薔薇を失つたとしても、辛い思いをするのはわたしだけですから」  
いい人だな…

洋は思つた

「あなたもそこまでしなくとも、解けなかつたら、残念…で終わればいいのですよ」

静也さんは笑いながらそついた

「それは出来ませんよ」

洋はキツパリと言い放つた

「なぜですか？」

「なぜなら、あなたも僕からみれば、笑つて欲しい人々の内の一人ですから」

静也さんは一時キヨトンとしていたが、また笑だした  
「別にいいですよ、辛いって言つのは、利沙に怒られるつて言つだけですから…」

「だけど、僕は守つてみせますよ…その笑顔を」  
洋がそう言つた瞬間、楓が後ろから飛びついてきた  
「ふつふつふ…まさか私のことを忘れてないよね～？わ・す・れ・  
て・た？」

「いや…ちゃんと憶えてたよ」

「ほんと？？？」

「本当だつて…！そんな事より、この暗号を解かなくちゃ…！」

横を見ると、大人三人は温かい目で見つめてきていた

「ふつ、その必要はない…謎はすべて解けた…！」

楓は言い放った

「いや…ちょっと待つて、怪盗Qの素顔は分かつてない…」

楓は後ろを向いて何かを呴いていた

そして、

「謎はほんの一部解けた…！」

パチパチパチ…

拍手は孫の成長を喜んでいる様な感じの容疑者一人から送られた

## 一輪の花

「まずは、怪盗Qが誰に化けているのか……」

楓はゆっくりと話し始めた

「それは……坂梨さん、あなたです」

楓は、坂梨さんを指差しながら言った

「ちょっと待つてください、何故私だとおっしゃるのですか？」

「その前に、一つお聞きしたい事があります」

「何でしようが？」

「あなたは昨日、私を見ましたか？」

何でそんな事を聞くのだろう？

楓を除いたみんなはそう思いました

「もちろん、見ていませんよ」

…え？

洋は驚きました

「いいえ違います。あなたとは昨日、レストランで会いました……その事を憶えていない……それが坂梨さんが怪盗Qの正体ではなく、怪盗Qが化けているという決定的な証拠です……」

…

「その通りです」

そう言つと、坂梨さんは、自分の顔を手で覆い、一気に何かを引つ

張った

ビリビリ

特殊メイクの内側から現れたのは、30代の男性だった

怪盗Qが姿を表すと、楓は色紙とペンを出した

「佐美子さん、これを」

「おお、ありがとね」

佐美子さんは、怪盗Qにサインを書いてもらつた

「ついでだから、集合写真も撮りませんか？」

怪盗〇は、流石に素顔はダメだと言つてきたので、仮面を被つても  
らう事にした

「はい、チーズ」

カシャッ

皆で写真を見てワイワイヤつてると、怪盗〇が言つてきた

「皆わん、ずいぶんと…余裕ですね…」

「違いますよ」

皆反応しなかつたので、洋が返事をした

「ここにいる皆は、あなたが捕まつて欲しくないんですよ」

「そうですよ、あなたを見下しているのではないのですよ」

静也さんが続けて言つてきた

「私は、あなたを尊敬していますからね」

「そうですか…探偵さんは、なぜ？」

「ライバルがいないと、暇なんだよね～一応、高校生だから殺人と  
か相手にできないし…」

「なるほど…しかし、金庫は空かないままですよ？まだあなたをライバルと認めるわけには行きませんけど？」

「しようがないですね、それじゃあ謎解きをしましょーか…！」

「まず、これが今回の暗号です」

楓の後ろには、いつの間にか用意されていたホワイトボードがあつた  
そこには、

『 2 2 4 3 5 1 2 2 2 5  
2 4 3 6 7 1 8 5 9 1 0』

と、書き込まれていた

「まずは、書かれている数字からヒントを見つけます…この場合、  
下に書かれている数は、1 10になつています。それを、きちんと  
とした順番に並べます」

そう言つと、楓はホワイトボードに数字を書いた

『 1 2 4 2 2 3 5 2 2 5』

「しかし、これでは、金庫の暗証番号にはなりませんよ?」

金庫は、4桁の数である

「そんな事は分かつてます……問題はここからです。ここで出て来るのが、ポケベルですよ」

「ポケベル?」

「ポケベルは、あんを1~0の番号で表し、あおを1~5の番号で表す、それを入力して通信するメールのようなものです。これをあてはめると……」

楓は、文字を書き始めた

『いちくにい』

「これを数字にすると、」

『1 9 2 5』

「となり、金庫の暗証番号は、1925……といふ事になります。違いますか?」

静也さんは、金庫に楓が出した番号を入力した

ガチャ

「開きました!!」

静也さんの驚きの声が部屋に響いた

「どうですか? 怪盗Q」

怪盗Qは目を瞑っていた

そして、

「…名前はなんて言つ?..」

「星野楓…ピッヂピチの16歳だよ」

「覚えておひつ…むりばだーー。」

ボンツ

いきなり怪盗Qから煙が出てきた

「誰も警察に通報する気ないのに、なんで煙幕を使つんだらう?..」

「怪盗の美学つて奴よ、きっと」

煙幕が晴れた時には、怪盗の姿はどこにも無かった

そして、ごつい金庫も、なくなっていた  
一輪の花が、何事も無かったように、静かに咲いていた

## 好敵手

怪盗が現れてから、4週間がたつていた

「あち～」

ソファの上で、洋はグタ～としていた

「大人気ないね」

楓は、pcで何かを調べていた

「大人じや無いもん」

「…男気ないね」

「…何調べてるの？」

「これこれ」

楓は、pcを見せてくれた

そこには、

『怪盗〇現る！』

しかし、強敵によつて獲物にがした

今回で二度目の失敗

二度あることは三度あるのか？』

と、書かれていた

ついでに、楓は記者に、

『あと少しというところで逃がしてしまった

次は必ず捕まえて見せます

待つてろよ！－怪盗〇！－』

と言つていた

「あんな嘘ついて良かつたのか？世界中の人に嘘付いたようなもんだぞ？」

「嘘だとわかる人の中には、その事をいつよづな人はいないから大丈夫だよ」

「それでいいんだ…」

洋は、気になつていたので、聞いてみる事にした

「ところどき、」

「なに？」

「なんで俺をここに呼んだの？」

ここは楓の部屋である

一般的には、年ごろの男女が一緒に部屋にいるのはよほしくないが、楓に限つてそんな事をするとは思えない

「給料、いる？」

「いる」

「じゃあ、あげようじゃないか！？」

と言つと、楓は机の引き出しから札束を取り出した

「プレゼント フォー コウ！…」

「ありがとう」

札束だつたのでビッククリしたが、千円札60枚の6万円だった

「めちゃくちゃ多いね」

「事件が少ないから、もらえる時は、たくさん貰えるかも…？」

「こんなにもらつていいいの？」

「大丈夫だよ、私はもっと貰つてるから」

「…静也さん…大丈夫かな？」

「まあ、これで今月の家賃は払えるね」

「事件がない時は大変そうだ…」

洋は、自分の考えを置いておいて、楓と一緒に大家さんの所に行つた

ここは、ある国の、ある所にある、ビルの三階である

そこの一 角にある部屋は、昼間なのに真っ暗だった

「おい、Qーーーコース見たぞーーーお前子供に負けたのかよ？…」  
いきなり男の人の声がした

「まあな」

今度は、違う男の声が聞こえて来た

「貴方らしくもありませんね、何があつたのかしら？」

さらに、女の声が2人の会話に割り込んで来た

「まあ、人の暖かさに、感動しただけさ」

「一番目の声が答えた

「全く、よりによつて16の少女に負けるなんぞ……お前は四天王としての自覚つてのはあるのか？」

「一番目の声が言つた

「済まんが、そんな物はないな……あるのは自分の信じる美学だけだ」「そんな事言つてるから、失敗したんだよ」

「まあまあ、落ち着きなさい……ここに帰つてこれただけでも、いいではないですか」

三番目の声が、一つの声の持ち主を止めた

「……そんな事より、そいつ……」

か細い女の声が聞こえた

「そうですよ、また我々に新しいライバルが生まれたのですよ？この人について、色々と教えてくれません事には、動いても、また止められる可能性がありますよ……5年前の川溝探偵みたいに」

三番目の声が言つた

「そうだな……まあ、俺が知つてゐる事は話してやるよ」

そして、一番目の声の持ち主は電気を付け、テーブルの上に一枚の写真を乗せた

「五年ぶりの好敵手だぜ」

## 好敵手（後書き）

こんにちは、銀咲です

学校では、強歩会（強制登山）があり、クッタクタです  
全く、なんで受験生も参加しないといけないのか：  
そんな事はおいておきましょう  
あとがき、すたーとです

今回のお話は楽しんでいただけたでしょうか？

設定上は、7～8月にかけてのお話です

暗号の解読のためのヒントが古すぎだと思つた方、すみませんでした  
次のは、現代風にいきたいと思います  
文法がおかしいと思つた方、その事は自覚しています……が、多分ク  
セです。治すように努力するかも知れません

この小説は、一日に1～2話更新していくと思います  
正月やお盆も、皆で楽しんでいる時に、銀咲は一人で家に向かつ  
て力チカチやってる…というわけではないですよ。  
まあ、頑張つていこうとおもいます

次回予告です

次回は、洋の過去についてのお話です  
なぜ、洋は高校に行かなかつたのか？  
なぜ、洋は探偵に憧れたのか？  
なぜ、洋の親は現れないのか？  
すべてが解き明かされる、第二章です  
読んでいただければ嬉しい限りです

最後に

たつた一つだけだけど、ネタを考へてくれたバナナさん、ネタをボツにしてすみませんでした。書つのが遅すぎです（メールだから、送つて来るのが…かな？）

小説を書く時に必要な、電気代を払ってくれてこる両親、ありがとうございます（いりやいります）

そして、111まで読んで下わった読者の皆様、どうもありがとうございました

これからも書いていく…かもしません

それでは、また一章で会いましょう

銀咲より

感想、苦情、アイティア、挿絵などがありましたら、111に送つて下さこ

http://nakano111.com

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3376z/>

---

少女探偵

2011年12月19日16時48分発行